1田一氏のガムシャラ人生-

口高屋とは何ぞや

野原なので、おどろいたであろう。大杉栄が目をさましたら、二二年たった東京がまだは

カスパのような迷宮ができあがった。の焼野原に、木の香も新しいバラック店が建ちならび、の頭線と集中するだけに、復興が早かった。駅のまわり、強谷は、省線、都電、地下鉄、玉川電車、東横線、井

りをたてている。屋があった。墨のにじんだ「吉高屋シチュー」の大のぼ屋があった。墨のにじんだ「吉高屋シチュー」の大のぼ駅前第一マーケットの入口に、よしず張りのシチュー

その昔、トロツキー張りのアナ・ボル協同戦線を策

原晋太郎

ヤジだ。 黒づきんと黒ラシャジャンバーの吉田一が、そのオた。黒づきんと黒ラシャジャンバーの吉田一が、そのオて「吉高プラン」と悪名高かったのを、屋号にしたもの

飯でうをさげて、買いにくる人もいた。 ・ は電気になった。当時ハイカラな食料であり、 で、リャカーで運んだ。水で薄め、切り刻んだ大根、人 で、リャカーで運んだ。当時ハイカラな食料であり、 学養源であった。安いし、味がいいので評判がよかった。 栄養源であった。安いし、味がいいので評判がよかった。 ではモンペ、男は国民服か兵隊服、みな戦争中からの 大人で、リャカーで運んだ。当時ハイカラな食料であり、 大人で、リャカーで運んだ。当時ハイカラな食料であり、 ではモンペ、男は国民服か兵隊服、みな戦争中からの 大人であり、 であった。 であった。 であった。 のできるげて、買いにくる人もいた。

ある日、顔なじみの刑事がいった。

ワケねえんだからな」 「ちっとはモリをよくしろよ。ヤミでしょっぴくのは

とたんに吉田はどなりかえした。

ねえだろうよ。 ら、しょっぴいてみろ。留置場が幾つあったって、たらら、しょっぴいてみろ。留置場が幾つあったって、たらろう。ヤミならとの町全部がヤミ商売だ。しょっぴくな「よけいに食いたきゃ、それだけ金を払ったらいいだ

が、俺は半額で奉仕しているんだぞ」んだ。見ろ、どこの店だって何でもかんでも十円単位だんだ。見ろ、どこの店だって何でもかんでも十円単位だんだ。

刑事は顔を赤くして、コソコソ出て行った。店を手伝っていた水沼熊が、よろこんで大笑いした。

隅で丼をかかえていた新聞記者が、声をかけ

to

の寄り集りよ。「なあに、昔から警察なんざ資本家の犬で、人間の早「オヤジさん、大した度胸だねえ」

に、いくらかでもと思って始めた薄利多売さ 」の政治の改革も必要だが、さしあたり飢えた都民の一部業だ。腹がへっては戦さはできねえ。まず食わせるためゼネストだ何だとさわいでみても、祖国復興は至難の

「 故あって入党はしねえが、その昔、ピンさんと呼ば「 オヤジさんは、共産党びいきか 」

れた主義者よ。

といつは俺の著書だ」

「レーニン/という文字を書いて玄関の鴨居に貼って一が代作したものだが、その書き出しがおもしろい。かった彼に書けるわけがない。実は、話を聞いて中村還かった彼に書けるわけがない。実は、話を聞いて中村還がに得意になってバラまいたものだが、目に一丁字もな彼は得意になってバラまいたものだが、目に一丁字もながは得意になってバラまいたものだが、目に一丁字もながの代作したものは、一九二二(大正一一)年に棚から出して見せたのは、一九二二(大正一一)年に

と巡査が張り番をしてくれるから。ではない。嘘だと思うなら、ためしにやってみろ、きっではない。嘘だと思うなら、ためしにやってみろ、きっおけ、泥棒よけの御符になる。いや決してただの冗談「レーニン/という文字を書いて玄関の鴨居に貼って

でもない 何でもない、五尺四寸余のあまり見ばえのしな 世界を に人間 者にとっては、 真紅に染まった地球の一角からヌッと首をつき出して るまい。といって、彼は臂力衆にすぐれ、 れ、そしてレーニンほど深く愛せられている人間 実に、今の世界において、レーニンほど へいげい 0 の首を引ってぬくというような鬼の生れ いとい 恐怖の 彼は愛の使徒ポーロの生れか ただの人間である。 幻想である。彼を愛するロシャ しているように見るのは、それ ってまた、世界の人道主義者でもない。 ひとつか 深く恐れ わ いスタ は資本 かわ りでも の労働 は 5 b 2

- 36 -

めて 数日 カメラマ 義親を吉高屋にひ た新聞記者はピンに ンと一しょに待機することになった。 終戦内閣の総理をし っぱってきた。 おだてられ、日どりをき た東久邇宮と元 公

ねえ」とい あついの 久邇は店に入って、さっさと食べおわ ほう、なかなかの繁盛じゃないかし 12 いながら、丼を啜った。 君は早いねえ。 しか 世の った徳川 中も 17 7

ピンちゃん会見記」が、デカデカと新聞に くらんだのだが。 岩佐作太郎の焼鳥屋記事の故智にならって、 写真入りで鼻もちならぬ提灯記事「東久邇宮・元闘 放題やりたい放題は、 相手の立場やおもわくを少しも考えず、鳥屋記事の故智にならって、宣伝をた 昔のままであ 000 7 た。 た。 士

を発行した。週刊、タブロイド版四ページであった。編 伝統を誇るにしてはあまりに時代錯誤な、『平民新聞』 た。芝の文化工業会館に事務所を借りて、 前派と戦後派 敗戦の 翌年五月、日 近藤憲二・植村諦聞・遠藤斌・久保譲が担当 (合せて二百余人が日赤本社講堂にあ月、日本アナキスト連盟が結成され 幸徳秋水ら 120 つま

との機関紙の演説行商が、 かなり長いあいだ続けられ

> ンドイ た。九州では副島辰已らが、東京では岩佐らが中心 で、警官や鉄道員が妨害すればするほど、よく売れた。 って、 シチューを出した。 から の ŧ 和田栄吉が、 ある日、渋谷駅のホー た。三人で吉高屋に行くと、ピンは大喜びで特製の 「 無政府主義宣伝 」のプラカー ッチマンスタイ 平岩巌に会って、 ルでやった。駅の構内 ムで、満洲から引揚げたばかり 立話していると、 ドをぶらさげた や列 岩佐 Ø 中

ンの首 食べおわ のあ たりをなでながら って平岩が煙 正草を買い に出 たあと、 岩佐 はピ

えし 「君もなかなか抜け目なく、 いろいろのことをするね

٤ 「人をバカにするな。そんなプラカーいった。吉田は真赤になってどなり出

(のホームをうろついて、無政府主義者もいいところだ。「人をバカにするな。そんなプラカードをぶらさげて 子供あつかいして、頭をなでるとは何だ」

ゃないんだからし 「まあまあ、ピンさん。岩佐さん も悪気があっ たわけ

和田が タジタジであ なだめたが、アジテータで鳴らした岩佐もさす った。

ろ

木賃宿に育った闘士

離れ かで清潔な町であった。対照的に、 の豪華な別荘が建ちならんでいた。 隅田川畔の橋場町には、江戸時代からの貴族や実業家 た山谷は貧民窟であった。 、お化地蔵をへて少し

た。現在 **桑原は同志には「クワレン」と呼ばれ、職場で** 秀英舎に、一九〇四年三月から欧文植字の実習生に入っ 銭か十銭の宿銭も払えず、とどこおらせる人々がいた。 の小部屋に、数人の家族が何世帯も泊っていた。一晩八 水沼徳三郎はことで木賃宿を営業していた。二畳、三畳 英舎鉄工部に機械工として勤めていた。次男の辰は 一九〇五 水沼の長男真澄は、早稲田工手学校を出て、牛込の秀 できたえられて、アナキズム運動の闘士となっ った。 た。体が大きく、 の大日本印刷である。辰と桑原錬太郎はここの (明治三八) 年から二七(昭和二) 年まで、 目がギョ ロリ とし、 ひはつ 「鰊州 11 た。 同じ

ところで、秀英舎主の佐久間貞一は、 の大恩人で、日本 のロ バ 1 才 片山潜が「労働 エンともい うべ

> 同業や下請と貸資協会を作ったりした。 き人だ」と評するほど、熱心な進歩的な男であった。職 の保護施設の改善につとめ、一日おきに嘱託医を呼び、

「私がかねて期待していたことだ。大いに協力佐久間に相談した。佐久間は経営者でありながら 工場の池田竹次郎らが活版工組合を組織しようと計画し、 秩父事件のおこった一八八四 (明治一七)年。市ケ谷

と大喜びし た。 力しよう

と が っ 課長 恐れ 職した。 思想 るのだろう、と誤解するものもいた。彼は時期尚早 なく死んだ。 想・皇国思想に毒されている職工たちは、労池田は早速、相談会を何回かひらいた。しか をへて を かりして運動をやめてしまった。池田はのち植字 いだいた。 牛込原町 監事になり、一九一一 (明治四 中には、池田が私服をこやすために のあたりで居酒屋をはじめたが、 四)年でろ退 労働運動 し、 カン 71 P

んで秀英舎の職工と衝突して暴力沙汰 を説得した。だが今度は他社の印刷工が反対し、党を組 それから五年後、 いう男が組合運動を志し、 けてしまっ 一八 八九九 (明治二二) 佐久間の賛同をえて職工 にまで 年に、 極部 2

は日清戦争後、 社会運動がもりあがるようにな

も出て労働者のために熱弁をふるった。 てからも、労働問題の解決に力をかし、 演説会に何度

どより平均一○パーセント以上低いから、差引き同じこ はいい。しかし賃金率は、国文社、築地活版、 また、夜業九時間で一日分に計算したので、ほかより割 を定時としていた。昼食時の三〇分は職工の負担だが、 った伯五郎は、職工を虐待し毎晩のように徹夜残業を かの会社は一〇時間が定時だったので、三〇分短かい。 水沼辰が入社したころ、秀英舎の労働時間は正味九時 かねた職工は、翌年一〇月ストライキにたちあがった。のは二〇人もクビにするなどの暴挙をつづけた。たま い、ワイロで賃金を上げ下げし、自分の気にくわない 反動化した。一九〇二(明治三五)年末に印刷課長に 秀英舎の賃金は 佐久間の没後(一八九八年一一月六 博進社な 旦

とになる。 欧文工 五〇~六〇銭

和文工 四五~五五銭

文選工 三〇~ 四五銭

印刷工 解版女工、 四〇一五〇銭 見習工 一〇~二五銭

それから、 秀英舎の特徴は毎月定休日のないことであ

た。職工長(課長)は新入社員に

そう説明した。 が、働くものの利益になる」 ない。夜業も入れると月に七日は違う。結局当社 のかわり月に三一日かせげる。他社は二八日しか 「当社は、給料は世間から見ると一割がた安いが、そ かせげ のは う

円。一五日未満は一〇円の賞金を出した。 防いだ。一年間無欠勤だと一五円。 どは年中徹夜だ。その上、奨励金法をつくって、欠勤を 一年の四分 ノ三は三し 五時間 の夜業が 欠勤六日未満は一二 る。印刷部

- 38 -

とい ときは一四〇~一五〇人であった。徒弟ははじめ「生徒」 にパンに追われて体に鞭打っていたかがうかがわれよう。 するが、 膿んで籟患のようになる。 嘱託医が一日おきにきて手当 六棟の寄宿舎は不潔そのもので、蚤や南京虫の巣窟であ くに通勤を希望するもののほかは、全部寄宿舎に入れた。 していた。多いときは三〇〇人をとしたが、辰が入っ した秀英舎の実情がこれである。 った。南京虫に食われたあとが疥癬になる。重いものは 秀英舎では、五年以上七年の年期を定めた徒弟を養成 メイド・イン・ジャ 2 たが、のちに「実習生」と呼ぶようになっ 抜本的 な対策をとらないから、 パンのロバート・オーエンの経 当時の印刷工が、 病人はふえるばか た。と 11 to カン

せるが、目はキラキラかがやいて色男であ 7 た。

羽目 だが、会社に密告されて、真澄と吉田は会社を追われ う考えて、吉田は真澄を職長にかつぎあげようとした。 場から労働条件の改善をおし進めるのも一つの手だ。そ 組合の結成が困難なので、下級幹部として会社側の立 なった。

実は何と一二人兄弟であった。 おこう。三人兄弟というのが伝説のようになっているが名はほとんど知られていないので、ことに記しとどめて 水沼辰 ・熊・浩のアナキズム 活動は有名だが、真澄 るが、 0

組合「小石川労働会」を結成した。 になった。一九一九(大正八)年八月三日、工廠で労働 真澄が生れたのは、一八八七(明治二〇)年であ 秀英舎をやめた彼は、小石川の陸軍砲兵工廠の旋盤工 った

技友会 所内に分存していた友愛会(のちの総同盟)支部、芝浦 との間一九二一(大正一〇)年一一月一七日、芝浦製作 の組合が合同して、「芝浦労働組合」を結成した。 その後、芝浦製作所に移り、関東大震災まで勤めた。 立憲労働議会袖ケ浦支部、共隆会芝浦支部の四 シリである。

.

るまで 支給することになっていた。だが二円以上貰うように 徒弟には払わないが、月五〇銭以上四円までの小遣を は、大てい年期が明けてし まっ た。 ts

れた。 常二郎、野本正吉らとともに、東京の欧文工を糾合して、一九〇七(明治四〇)年四月、辰は峰岸正次郎、古川 労働組合「 欧友会」を結成し た。この年、 末弟の浩が生

て入ってきた。 そして、このころ吉田一が秀英舎に鍜冶工として入

それで立派な字になっているのを、俺の名にじてくれた「俺のオャジは偉いよ。たった一本棒を引っぱって、 んだからなし

日給は七〇銭たらずであった。 吉田はそんなつまらない自慢に肩をそびやかし 1:0

とりかえる、といった註文がたまにあるくらい 風呂ガマにヒビが入った、鋤の刃が折れた、馬の蹄鉄を た。鍜冶屋の小僧をしていたが、ポンプがこわれ 吉田は一八九三(明治二六)年、 ないので東京に出てきたのだ。大柄な体に、窮窟 ス りの筒袖を着ていた。一本刀の駒形茂兵衛を 千葉御宿の農家に生 で、 た 商売

計報告会がひら 翌二二年五月七日、月島労働会館で第二回 かれた。 メーデー会

をくりかえした。 0) U. 三〇日、大阪市天王寺公会堂で創立大会がひらかれる運 17 自由連合派は、 げしくなっていた。大会を前にして、労働組合同盟会 それ 合総連合の計画を進めよう」と提唱し、満場一致した。 その席で教 なった。 から創立準備委員会がつづけられた。そして九月 アナ・ボルの対立はようやくこのころから、 員組合啓明会の下中弥三郎が、「全国 芝区浜松町の真澄の家の二階で、 協議 一労働

(信友会)

田 栄太郎 (正進会)

辺 = (時計工組合)

俵 (純労働者組合) (造機船工組合)

杉 (日本機械技工組合)

(本芝労働組合)

信次郎 (日本労技会)

唱、 佐藤陽一、天土松太郎(芝浦労働組合)

そのほかがあつまった。

裂してしまったのである。…… この創立大会は総同盟の裏切りと官憲の圧迫で

> おとっ 争議にくわわった。 労組組合長の杉本弥助であった。真澄は杉本をたすけ たまたま、上川郡神楽村の宮内省御料地で小作争議 た。 この指導的な役割をしていたのが、もと芝浦 真澄は北海道に渡っ

て

験所につとめながら市ケ谷の士官学校近くで自転車屋を 部機械工業実験所につとめ、 していたととがある。 この世を去った。 東京職工学校を出た弟の熊も、同じ実 |機械工業実験所につとめ、一九四五(昭和二〇)年に二年後に争議が解決して、真澄は帰京した。東大工学

づ n

- 40 -

賃宿にやってきた。 一九一三 (大正二) 年、 吉田一がひょっこり水沼の 木

したいんだ」という。 「組立式の幼児用ベッドを発明したからそい つを製造

できた。 は荷車に金敷、炉、フィゴ、 荷車に金敷、炉、フィゴ、大小のハンマ家の裏にある物置小屋を改造して、工場 ユ場にした。 吉田

音振動公害だ。吉田が金敷の下の角材をどけたら、 ンとはじめた。 小僧を二人やとって、トンテンカー 早速、近所から苦情が出た。 ン、ト 今でいう騒 ンテ ンカ

音になって半減したが、地ひびきは前よりひどくなった。 生れ その 150 間、訪ねてきた同郷の山岸みつと結婚し、女の子

だが まりで、小僧にもやめてもらった。 が、吉田の事業ははかばかしくいかなかった。一年あベッド、ハンモック、子供自転車などを作って売込ん

身重の女房を置き去りにして

その後男の子を生んだみつは、怒って田舎に帰っと駄洒落をいって、どこかへ出かせぎに行った。「寝台づくりで身代かぎりか」 ま った。 T

+ to って、米価が暴騰して米騒動がおこった。 このシベリヤ出兵を見とした仲買人の米の買いしの反革命をたすけるために対ソ干渉戦争をおとし 7 このシベリャ出兵を見こした仲買人の米の買 メリカ、イギリス、フランスとともに、 シャ革命が 自国の労働者階級に及ぼす影響をおそ 日本 \$ た。 め ロシ 17

が数 九 日 のうちに三七市一三四町一三九村に波及し、数万人がはじめた飢餓突破・米の安売り要求の大衆行動は、九一八(大正七)年七月二三日、富山県の漁師の女 警察力だけでは おさえきれず、 軍隊が出

点延べ二〇〇、出動兵力は九万二千人以上であ 動して弾圧した。陸軍省の資料によれば、全国の出兵地

ネあ 米価問題などは一番に解決される」の一節があ その文中に、 落ちていた。 者の平均日給は九二銭で、 水沼は米騒動煽動容疑で、検事からきびしく追及された。 するビラを、 八月七日、 がった。 では荒畑寒村の書いた「孤立、我らを殺す 東京の米の小売価格は一升五〇銭にまでハ 近藤憲二と水沼辰が印刷してバラまいた。畑寒村の書いた「孤立、我らを殺す」と題 (二年前までは一三銭であ 「労働者が強固な団結をもって当るならば、 戦前の七〇 18 1 2 た)逆に労働 セ ント ったため、 以 下に

市民にくばった。 東京府知事井上友一は八月一四日、次のようなビラを

記念日八銭、内地米ハ時価ヨリ一〇銭引 細民救済購買券二付、 内地米時価ヨリー升五銭引デ 白米小売商

家にやってきた。 との サクサの 最中に、 吉 田一は瓢然と浅草の 水沼の

吉田 は水沼の家から、 南千住駅構内の奥村車輌へ通う

- 42 -

鍜冶工の日給は平均一円一七銭、 五 の運送 うにな |工の日給は平均一円一七銭、日傭人夫は九六銭である車を修繕する鍜冶屋商売が、結構いそがしかった。||公から一〇頭ぐらいの馬を飼い、荷車が置いてあった。)は、数軒の馬力屋が請負っていた。馬小屋にはった。南千住に国鉄隅田川貨物駅があった。荷 った。南千住に国鉄隅田川

ンは 子は吉田に引取らせようとした。みつと別水沼辰は、吉田の女の子を山岸みつに引 田舎へ脅しに行ったりした。 別れたくない。男 ピの

「己士、「己士、」、これいたのだが、住出ンは、一人は一九二〇(大正九)年ごろ同棲するようになった。二人は一九二〇(大正九)年ごろ同棲するようになった。二人は一九二〇(大正九)年ごろ同棲するようになった。

+ カ兄弟になったってわけだ」 「一何がい 「兄貴、 ンチャク は絶品だよ。これで、兄貴と俺は本当の何 あ、ひとさまざまだもの。とにかく、 いんだ。そんなにいい女となぜ別れたんだお前はいい女房をもらったぜ」といった。 あ 12 ١ 0 -

くだらないことをいうな」

17 なっ セント H がおこした欧友会は、第一次大戦で欧文紙の発禁 て、 在留外人の商店閉鎖や帰国などによって、二〇パ 近い失業者が出た。東京の印刷工は無組織状態 資本家の迫害にさらされた。

クビに なって施行された。これを機に、長年勤続者や病弱者を一九一六(大正五)年六月、懸案の工場法が骨ぬきに する工場主がふえた。

づ 2 ま」で大会をひらき、新たに「信友会」を結成した。 た。その槍先を吉田に頼んだ。 ストライキやデモにそなえて、と水沼らは組合旗を作 一〇月三一日、 水沼は五〇余人を糾合し、浅

を人 ねえ 四〇人や五〇人突刺しても、 てから三角錐に鍛造し、角ビシでエグリをつけ て折り曲げ、たたいて玉にする。何度となく練りなお赤熱した鋼の玉をたたきのばして棒にする。また焼 「日本刀と同じ鍜えかたをした。これならオマワリの れ、ピカピカに研ぎあげた三枚刃の槍先が 刃コポレひとつすることは ~できた。 た。 焼 \$ L

とピンは自 慢し た。

ピンと大 の軌

尾行づきに昇格

っ て内務省のブラックリ た。 内務省のブラックリストにのり、尾行がつくようにな大逆事件ののち、社会主義者は「特別要視察人」とし

(急進)派 (大正 八)年 0) 名簿に は 筆頭に、 無政府主義

中心的人物

ニ編ス)と註記されている。 くわえられた。(大正七年一一月一五日、 りと並んでいる。その中に、吉田一と延島英一が新たに 中村勇次郎、 村木源次郎、高田公三、水沼辰、鈴木重治、吉田只次、 とあり、伊藤野枝、服部浜次、久板卯之助、和田久太郎、 根岸正吉、山鹿泰治その他大勢の名がズラ 特別要視察人

T 吉田は水沼辰・熊と兄弟のようにつきあい、感化さ 無政府主義を信奉するようになったのである。 n

丁字もない吉田は、根掘り葉掘り、 吉田は辰から、マルクス、カウツキー キンなどの説を耳学問でおぼえてんだ。目に一 だが、 彼はいっていた。 納得ゆくまでしつこ バクー ニン、

> 7 とり早くて、わかりやすくていいや 「 辰兄貴の話は高尚すぎるぜ。 熊さんの話のほうが手

足も出なかった。社会主義のシャの字も口に 事件ののち、各方面に大弾圧がくだり、社会運動は手 一九一〇(明治四三)年にフレームアップされた大逆 でき TI カン 7 6

畑寒村 嵐に吹き消されがちな、 ている状態であった。 をささえながら、月一回か二回集会をひらい 堺利彦が四谷の自宅ではじめた売文社で、大杉栄、 ・和田久太郎ら二〇数人が翻訳や代 社会主義のわずかな火種を守っ 作 た。迫害の などで生活

待つことに耐えられなくなってきた。 U かし、 血気さかんな大杉や荒畑は、じっ として時

合し もに、毎月一回「近代思想社集会」をひら 一九一二 (大正元) 年、『近代思想』を発行するとと 47 7 同志を

批評』を出し、 年一〇月、『労働運動』を出した。いずれ 一四年一〇月、『平民新聞』を出し、一七年、『文明 発禁をくった。 一八年二月、 『労働者新聞』を出し、一 もツルベ

さかて のほか、労働問題やアナキズムの研究会、演説会を

りを示すようになっ シャ革命と米騒動を機に、 労働 運 動は 画 期的 ts t

た彼の家がひきつづき会場になった。そして次のように五月に渡辺は肺炎で死んだが、それまで研究集会所だった合同した。一九一九(大正八)年一月である。前の年主宰していた)が、渡辺政太郎の号をとった「北風会」 主宰 とりきめた。 た彼の家がひきつづき会場に 五亿

ヤヨ(渡辺の内縁の事一、毎月一日、一五日の 講演を行う。 でヨ (渡辺の) 妻)方に会合しの二回、小石に i, Л 、主義の研究・

若林方を同志のクラブとする。

三、クラブは会員組織とし、 収して家賃の補助とする。 毎月二〇銭づつ会費を徴

四、主義に関する図書を集め、 随意閲覧できるよ うに

£ 世話人 話人は村木源次郎、吉田会の世話人は三人として 田一、松本とする。第一回のて毎月交替する。第一回の 0

五〇人近くになった。大杉は欠かさず出席し、荒畑ら北風会には毎回三〇人前後があつまり、しだいにふえ 大杉は

> 0 と講演した。堺も出て、欧米諸国の労働運動、革命運 歴史や現状などを講演した。

た。 いので、「ピンさん」「ピン公」と呼ばれて仲間から大事にされた。無学なわりにはもの仲間から大事にされた。無学なわりにはもの わかりが 可愛がら れいで

くなっ 畳にゴロゴロ寝ころんだり、 カン いて、うそぶくのだった。 ピンはだんだん た。わざと垢と油で真黒に汚れた筒袖をはだんだん図に乗って、無遠慮さと誇張 かゆくも ts to 42 筒袖を着てきて 体を 癖が ボ ij 3

るもんかし 「シラミやノミなんかをいやがって、運動者ヅラもあ

-44-

中町の百軒長屋の一軒を借りた 九九九九 (大正八) 年はじめ、吉田は水 沼辰と浅草 H

押入 いた。つきあたりに襖がはまっている。あけると片側四畳半ひとまだが、その半分は板敷きで台所をかね れ、片側は便所であ った。 がて

た。 家の 息がつまるような悪臭がただよって

る日、魔子をおぶった野枝をつれて、 大杉が水沼館

った。 った。熊が大杉に会ったピンの家に案刊してくれ のしは、 との時 から は U

めて

7.

ンは 中 17 行 2 て、話して 3 ろうち 12 夜 から 4 11 to

「泊ってい 11 す す

び n 「刺身みたいにな たようになって夜あけを待った。 枝 は 寝が えりもできず、臭くて薄 て寝 りゃ、 八人 は寝 43 布 団のれ 中 3 C _ L

あ 物に出てきた。その中の一人がピンにいっ くる朝、路地 の共同井戸で顔を洗 うと、長屋の 150 連 中

「刑事が三人、ずっ と張りこんでるぜ」

カン 内させて日本堤署に引っぱって行った。そし ってくる。野枝がどなりつけたが、尾行は相変らず離大杉が帰ろうとすると、その尾行どもがピッタリ寄り あ て、尾行をとりかえさせた。 大杉は尾行の一人の襟首をひ っつかみ、ピンに て署長 7

入っ たピンは、 大杉の堂 K たる 態度に す 2 か h

とが、労働者を味方にひきつける最上の手段だ、とピンそれ以来、権力の末端機構の警察を相手に喧嘩するこ

は思

人の労働者があつまった。大杉と荒畑が演説し 集会をひらい 二月二三日の晩、ピンは長屋で労働者とアナキスト た。大杉、荒畑ら十 余人の同志と、 0

成功し して、 ピンは仲間の黒瀬春吉が「労働問題引受所」を作っ たのを見て、「労働相談所」の看板を出 L to T

用してもらいたい……」 君がお互いに知りあい、お互い て、諸君の自由勝手な寄り場にした。見ず知らずの「僕の家を労働相談所にした。僕の家を諸君に開放 知りあい、お互いにたすけあ由勝手な寄り場にした。見ず うため 17 諸し

とい 2 たビラを干枚印刷して、くばっ 1=

12 カ がたずねてきた。あわてて警官が監視にきた。ピンはヤ陸軍記念日(三月一〇日)の夜、近くの労働者十数人 ンに番茶をわか て出した。 し、塩センベイのコワレを盆に山 夜、近くの もり

「話が見えねえと、うまくね

が見えねえと、うまくねえな」 あげ

財産を奪いかえさなけ らまず、 本家の財産はみんな労働 に資本家を疲れさせて、しまいに 労働者は資本家に ば 者が作り ならぬ 対して賃金の á if to 1= は資本家全 増額を請求 もの

-46-

けじゃねえ ワリの保護を受けたものがいるか。ただ圧迫を受けただというが、ここにあつまったみんなの中で、果してオマ ワ な労働者が作ったものだ。だから、労働者が、サーベルそれにまた、オマワリの服もサーベルも帽子も、みん りだ。 ならなくなる。 労働者がストライキをやる時に、妨害するのも てろ、服を渡せといえば、奴らは裸で立番しなけ がストライキをやる時に、妨害するのもオマか。要するに、オマワリは資本家の番犬なん オマワリは人民を保護するために いる n

諸君がストライキをやる時には、妨害やスト破りを防 ために、機械に砂利をかけることだ。……

俺は帰 と。とうとう警察のほうがシタ手に出てあやまったから、 がたったのでぶんなぐってやった。日本堤署に引っぱら る私娟窟〕で遊んだ帰り、オマワりにからまれて、腹俺は、せんだって凌雲閣下〔いわゆる十二階下と呼ば たが、徹頭徹尾反抗した。この俺のどこが悪いんだ、 ってきた。

れたりする。 かで、罰金をくったり、ひどい時はブタ箱に放りとまところが諸君は、たまたま立小便したとか、裸でいた

れわれ は結局、反抗心がないからだ。反抗心が弱いから はあくまで反抗的態度をとって、奴ら官憲

> がどうにもできないようにしなければならぬ。 させていた。 あまりの権幕に、警官は 中止命令も出 せず、目を白

集金は毎月三回ひらいた。

せた。 三〇人あつまると、臨監警官は「無届集会だ」と解散さ い、七輪に火をおこして茶をわか中学一年だった水沼浩が、いつ 一年だった水沼浩が、 つも炭屋に行 した。労働者が って炭を = 0

久板、近藤の五人が、気勢をあげようと黒瀬の主宰する 労働同盟会の印絆纒を着て出席した。 四月二〇下の例会には、大杉、黒瀬、五十里幸太郎、

大杉の演説のあと、竹村菊之助が話した。

用はたりる。 すぎない。ただ生きて食っている分には、 わ 途には何らの希望も光明もないからだ。そうして、わ「僕は怠けものだ。なぜ怠けるかというと、僕らの れが働くということは、資本家をいよいよ富ませる 「僕は怠けものだ。なぜ怠けるかというと、僕ら 怠けていて 12 n

は罪悪ではないと思う」 いよいよ食えなく れの世の中のこないあいだは、怠けるというこいよ食えなくなれば、泥棒でもやるかも知れな いだは、怠けるということ

から 重症の肺結核をおして会合に出た源兄ィこと村木源次 、賛成して 7 た。

浚田平吉(啞蝉坊)がつづいて話した。 メシなどは食えようが食えまいが、そんなことは問 よいよ窮すれば、人の物でも奪うことだ

法律を無視しなきゃいけないよ」 だから、みん 無視することによって、しまいにはおこなわれなくなる。 まいが、みな借家人のお心持次第だ。法律なんてものは、 は全く無視されている。たとえば家賃を納めようが納め 「俺の住んで なは死もかつ辞せざる固い決心をもって、 いる下谷山伏町のイロハ長屋 では、法律

きくち た。そして 彼は前の年に出版して発禁になった『四季の歌』『う ・付・豆 粕ソング』『解放節』のパンフをくば 7

「今夜は特別 サービスだ Ĺ

ねぼ けマナコで朝の五時から弁当さげて イオリンをひきながら、 自作の四季の歌を歌 2

工場がよいのいじらしさ

娘ざかりを 塵の中

だようになって寝る

めぐる機械の歯車の間にはさまる労働者 れ見よタラリ タラリと生血がしたたる

でしまうまで搾られ

「晩めしを食いにいるある晩、ピンはたずり ピンはたずねてきた熊 ر ح ا

たらどうするかし がたかるじゃないか。食った人がみんな病気にでもなっ とさそい、近くの誠屋という カイゼル鑑をはやした巡査が女中をどなりつけてい 「食い物はガラス戸棚か何かに入れとかない 一膳めし屋に行 2 ٤, ١ エ

ピンは大声でい 7 た。

まいからこそ、ハエもたかるんだし てきてくれ。俺はハエのたかったのが大好きなんだ。う「おい、ねえさん、ハエのウンとたかったやつを持っ

巡査はふりかえって目をむいた。

んじゃ 「テメエこそ、メシを食いにきたものの邪魔をしてる 「コラ、俺が注意しとるのに、何を邪魔するか ねえか。弱いものい じめをするな」 _

「何、貴様、ちょっとこい」

きたんだ。どこかへつれて行ってくれるなら、 ってからにしてくれ 「どこへ行くんだ。俺 は腹がへったからメシを食 メシを食 いいと

熊は思わず吹き出した。

に大勢ヤジ馬があ T つまった。

T ゼリフを吐 つけろ いて出て行った。

T, 折れても三本の矢は折れ 「労働者を解放するものは労働者自身だ。 は労働相談所 織して闘え 冊作り、五月末、労働者にくば の機関 ぬ。労働者はガッシリ団結しは労働者自身だ。一本の矢は 紙として、『労働者の 友四 2 た。

彼は「ヒイ、フウ、 を八本書いた。 であ 調書をとられ、 7 ヒイ、フウ、ミィ、ヨウ」と数えながら、一の1をとられ、「これに署名しろ」とつきつけられった。ピンは出版法違反で警察に引っばられたた記事である。これは大杉がピンの名で作った 字た。 4

1111111

にヒョイヒョイと棒を書きくわえた。えらくマノビした とどなりそうになった。ピンは平然として、今度はタテ ては名前が符牒なら、文字も記号にすぎなかった。 前が符喋なら、とミーコー象形文字も何も知ったことではない。ピンにとっ象形文字も何も知ったことではない。ピンにとっ は、人との野郎、ふざけてイタズラ書きしやがる

彼は東京区裁で罰金四〇円を科された。 電灯盗用事件で市ケ谷刑務所にぶちこ

> まれた。その前夜七月二〇日、例会をひらいたが 0 演説で「中止、解散」を命じられ、家も追立てられ で、例会は自然消滅してしまった。 水阳

た。 伝をは た。 るあいだ、るす番に阿比留信一という易者を住みてま 橋を渡った川 草へ観相の商売に出ると、警官の目を盗 まにか無政府共産の理念をいだくようになった。夜、 ピンは家主にねじてんで、 アヒルも労働者集会や大杉の講演会 どつい男で、巡査がくると無言でにらみかえして じめた。 向うの長屋に移ると、ピンが昼ま稼ぎ かわりの家を探させ 益んでは主義の宣 伝なった。夜、浅 気などで、いつの 17 47 せ出泪

- 48 -

荒畑をはじめ京浜の同志が集会や演説会をはじめ 歌をどなりながら、『労働者の友』をくばったりした。 組合期成同盟会を作 労働新聞』を出した。ピンがこの編集発行名儀人になっ ピンも大杉にくっついて行って、戸部町の通りで革命 一九 七月に只次が社長、 一九年六月、横浜市戸部の吉田只次が、横浜労働 った。また、彼の家を根じろに大杉 大杉・荒畑・山川が顧問で『横浜

力車 夫志

して 意になっていた。 て電車賃を払わせたり、メシ屋に案内させたりして得ピンは、いっぱしの主義者になった気で、尾行をおど

てしまっ 7 た。その話を聞いて、 しまった。雑誌の印刷代は広告料でまかなう算段で引札がわりにバラまく雑誌を計画して、鍜冶屋をや 大杉はため息をついた。

が多く出るようになると、運動から外れてしまうだろう」「ピンはいい男だが、人をくいものにするあの悪い面 四日、南千住署に「人力車輓子免許下付申請」を出した。 雑誌のプランもだめになり、食いつめたピンは三月一 警察は何のかのと理窟をつけて、なかなか許可しなか 「ピンはいい男だが、人をくいものにするあ

一九日、ピンが警察に行くと警部補が

「目下詮議中だから、今少し待て」という。

メエみたいな下ッパじゃ話にならねえ。署長に 会

したり放り投げたりした。 た警官をピンはなぐり倒し、 ピンは二階にかけあがろうとした。ひきもどそうとし おさえられ なぐりあいのすえ、 あたりの机や椅子を蹴とば ピンはとり

2

士山崎今朝弥にたのん ・打撲傷を負った」と警官十数人を被告として告訴した。 あいを見て署長があらわれ、説教されて放免となっ だが五月一四日に不起訴になった。 どうにも腹の虫がおさまらないピンは、社会主義弁護 あくる日、車夫免許の件は不許可処分となった。 、さすがの彼 もくたびれて、 で、「南千住署で暴行さ 静かになっ n て裂傷 ころ

黒砂糖をふんだんに使ったので、あまりもうけにはなら なかった。 「革命ダンゴ」を一串五厘で売り歩いた。よく売れたが、 その後ピンは、革命歌や啞蝉坊の作歌を歌い だが彼は、「 革命の宣伝だ」と、頓着し ながら、

花見と演談会もらい

をくばった。 兼次郎・水沼辰・山崎今朝弥らを世話人とし 観桜会をしようと、中村還一・近藤憲二・吉田一・斉藤 四月三日は神武天皇祭で休日であった。大杉は τ 案内状 同志

つまった。大杉と野枝自慢の手料理 当日、滝野川西ヶ原の大杉の家に三〇人近い同志があ で、盛大に呑んだり

ラノで槍さびや勧進帳を歌った。 少し酒の入った野枝はいいごきげんになり、メゾソプ

刑務所に入っても、インニ(一合二勺)のモッソウメシ さげては詰めこんだ。 滴も吞めなかったが、メシは人の二倍は食っ 近憲は奈良漬ひときれでも真赤になるほどで、酒は一 させたくらいだ。柔道の黒帯を何度もゆるめて、ずり は腹がへってたまらず、かけあってインゴ(一合五勺) た。何しろ

をあげながら、楽しそうに食った。近癥が呆れて いであった。ピンはいつも「ウマイ、ウマイ」と大声 しかし、吉田はさらにうわ手で、三人前 は平げ る大ぐ

「オイ、ピンさん、いいかげんにしろよ。腹も身のう

というとピンは

そう逆襲し、みな思わず大笑いした。 「コンケンさんが、 ひとのことをいえた義理かよ」

眺めがよかった。あちこちに毛せんやゴザをしいて、 〇センチ角の旗をおしたてて、飛鳥山に出かけた。 三時でろ、ズブ酔いになった二〇人ほどが、浅黄色六 染井吉野が満開であった。日光、筑波の山々や荒川 ろげ茶碗酒をくみかわす人々がい た。 重 0

> しかけた。 りして、日が暮れてから大杉の家にひきあげた。 その夜、大杉を先頭に一三、四人が王子警察分署に 一同は革命歌を合唱したり、花見客に 向って演説し お

任者を出せ 「花見の途中、 私服にブンなぐられたものがいる。

「そのような事 かけあったが署長 実はな は ٢ つっぱ

ラチがあかず、

一同は

ひきあげた。その途中、

ね

夫主催「労働問題演説会」のポスターを見て、 「よし、また演説会もらいをやろうぜ」

大杉たちは喜んだ。

- 50 -

の原稿が売れ出したので、金が入るたびに風呂桶を買っ 々しさを発揮し出した。わざと泥足のままあがりこんだ たり二階の廊下に籐椅子を置いたりした。 ン底生活であった。滝野川に移ってからは、獄中記など クも買えず、 ピンは、はじめのうちは神妙だったが、 一年あまり前、亀戸にいたころの大杉は、魔子の 一日二食、それも焼諸ですませるほどの 例によって図 ž

b. 無学なピンは、大杉が原稿料をかせぐのを、 火鉢の中にペッペッと睡を吐いたりした。 運動をく

しに行った。 とチリ紙をふところにしてかけま みな、いつ捕まってもいいように、 わって

か のにしている、不労所得だ、と反感をもっていた 0

節、熱海の海岸などの流行歌を次々にどなり、風呂から明るい湯殿で、パイノパイ節、デモクラシー節、平和 を見るように大目に扱っていた。 あがるといい気持で二階の籐椅子にもたれていた。 そういうピンを野枝は毛嫌いしたが、 大杉はダダッ子

かけた。 た。大杉は、久板、延島、ピン、石井鉄治らをつれ四月二一日、王子演芸館で労働問題演説会がひら てかれ

どなった。 杉原が社会主義を非難する演説をはじめると、 ンが

「ウソをつくな」

大杉は大きな目をいき

作ったばかりの雑誌『労働者』を吉田と石田にくばらせ政府主義について、労働運動について演説した。大杉は て、 テッキをふりながら演壇に出て行った。そして、無オ、俺は大杉だア、大杉栄を知らんか」 ひきあげた。

ると、「演説会もらい 北風会のメンバーは、労資協調のマヤカシ演説会があ 」と称して、片っ端からぶちこわ

席川 義団体初の演説会である。 一九一九 (大正 崎家で演説会をひらいた。大逆事件以後、旧社会主 八) 年七月一七 日、北風会は京橋の

三〇人ほど検束された。 たが、果せるかな弁士・聴衆と警官隊の大乱闘にな 築地署は「三人入場すれば解散させる」と豪語して 7 たい

吉田一が革命歌を歌い出し、大合唱になった。 大部分が放免されたが、北風会の大杉・近藤・ 留置場でまた、耳もつぶれるような大さわぎを演じた。 水沼熊

本や書きかけの原稿用紙を入れていた。彼は大杉らにて うかん色の紋付を着、縞の袴をはいていた。ふところに された。そしてそこに、 ・高田公三・鈴木重治・岩佐作太郎・吉田一の七人は残 ねいにおじぎすると 見なれない醜男が一人いた。よ

「高尾平兵衛です」と名のり、

ます」と挨拶した。 「演説会にきて巻添えをくった一人だが、 よろしく頼

ら高尾は大杉らの運動にくわわるようになっ

1:

- 51 -

めた。 敗し、一六(大正五)年、中国大陸に渡った。放浪のあ いだに堺や大杉の書いたものを読んで、 事業を志して家をとび出した。いろいろやってみたが失 早の運送店の次男に生れた。一九一三(大正二)年ごろ高尾は一八九五(明治二八)年一二月一日、長崎県諫 時に彼は特別要視察人のリストにものった。 社会主義に目ざ

をしていた。 翌年六月に帰国すると、 芝浦製作所の日傭労働者など

反しで引っぱられた。 銭も払わないので追い立てられていた。電灯料も払わな いので、 とうとう七月二一日、 彼は平気で電線をつないで使っていた。 ピンは二月から南千住に家を借りていたが、家賃を一 引込線を切られてしまった。 「電気窃盗並ビニ電気事業法違

吉田はすぐ山崎今朝弥をつうじて控訴した。 九目一三日、東京区뷿で懲役二ヵ月をいいわたされた。いリンチを受けたあげく、市ケ谷刑務所にぶちこまれた。 警察の道場で逆さ吊りされ、ヨイトマケと称するひど

一〇月一八日、 地裁は一審より重い懲役三カ月をい

> わたした。傍聴席に大杉、野枝らと一しょにいた近憲は 「判事のパカー

とどなって法廷をさわがせた。 ピンは二三日、豊多摩刑務所に入り、

た。彼の入獄第一号であった。 に出獄した。公判や入出獄の時は大勢の同志がや 同じ豊多摩に入っていた大杉は、 近憲あての手紙の 翌年一月二二日 ってき

らい元気がいいそうだ。……」 う。罰金は出来そうか。 出 「……吉田はいつ出るのか忘れたが、もう間もなか てきて行く場のないピンは、 先生、ここでも元気すぎるく 大杉の 家に住みこんだ。

ひとことピンにふれている。

☆日野氏の天皇批判は五十余枚の労作ですが、筆つつフランスを発った。長い間ご苦労様でした。 五~六回の連載予定です。今後のイオムをお楽しみに☆吉田一という特異を存在を描く萩原晋太郎氏の作品 解を得て二回に分載します。次号をご期待ください。 野氏の天皇批判は五十余枚の労作ですが、筆者の諒 今号で最終回。 ☆八回に亘った『ヨーロッパの旅』も 筆者は名残りを惜しみ イオムをお楽しみに。